

## 都市が変わるとき

藪田 貫

### 1 大阪城への道

平成の大改修を控えた大阪城天守閣 — ここに行こうとしたとき、皆さんはどんな道をとるでしょうか。

まず思い浮かぶのはJR大阪城公園駅からの道。大阪城ホールから「太陽の広場」をへて青屋口から極楽橋経由で天守閣にいたる道は、常に天守閣を前方に見上げながら歩く道である。指呼の間にめざす目的があるので、一見、「近い」と思いがちであるが、天守閣入口まで相当階段を上がらなければならず、歩いてみてかなり遠いと感じる。標高差がきついのである。しかも入口に着けばさらに待つ階段・・・・息の切れる人も少なくないだろう。

JR森ノ宮駅から、春秋、植木市の開かれる公園・噴水を通り、樹木の間を抜けて城に東南方面から進む道もある。この場合、天守閣は行く人の左手かなり前方にあり、大阪城公園駅の道と比べ、見るからに距離がある。標高差も同じである。ただこの道は、玉造口を出ると梅苑のあたりで、右にコースを取れば極楽橋から、左に取れば桜門からと二つの入口を選べるよさがある。

つぎに大阪市バスを利用するコースが、二つある。といっても降車地点は、どちらも大阪府庁前でひとつである。大阪駅 - 淀屋橋 - 天満橋と、主要なバスストップをへて東行してきたバス（上六、阿倍野橋行き）は、大阪医大附属病院をすぎたところで右折し、坂道をあえぎながら上り、府庁前に着く。坂を上りながら、バスの車窓の左手に、濠や櫓をへだてて天守閣が望める。視界の変わりようといい、樹木や櫓の向こうから目に飛び込んでくる天守閣の形といい、個人的にはいちばんお気に入りのコースである。

バス利用のいま一つの道は、このコースの逆で、上本町六丁目で乗ったバスは、上町台地を一路北上し、NHK大阪放送局をへて府庁前に着く。このコースの特徴はほとんどアップダウンがないことで、平地をスーッと来た人はNHKを過ぎたところで、

右手はるかに天守閣を見る。さらに大阪府警をへて府庁前で降車、大手門から入れば、天守閣の入り口まで一路、平坦な道が待っている。したがって足腰の弱い人にはとくにお薦めで、秋には恒例の菊花展が開かれ、目を楽しませる。大阪城の正門から入る点でも、西之丸庭園に寄り道できる点でも、メインルートとっていいだろう。もっとも、大阪城といえば坂道を上がるもの、と先入観のある人には、ちょっと物足りないくらい平坦である。その理由は、この道を通る上町台地が高いからである。

最後は地下鉄谷町四丁目からの道。これも大阪府警前に出て、大手門から大阪城に入るが、府警までがグラグラとした坂道。谷町という名の示すとおり大阪でも低い地点から、東へ、上町台地の縁辺を上って行くのだから、夏場ならしっかり汗をかく。おまけに道は真っすぐな一本道だけに、よけい遠く感じる。私は往路としては使わないことにしているが、復路なら最適。西に、大阪のビジネス街を見下ろしながらトトロと下って行くのだから気分はいい。夕陽の沈む時間帯などは、大阪らしい雰囲気を感じ上げてくれること受け合いである。昔のように海が見えれば最高であるが・・・

### 2 大阪はどっちに向いている？

大阪城にいたる5つのコースを紹介した。現代人ならば、どれを取ろうとそれは各自の勝手。私も季節によって、気分によってルートを変えている。しかしこの5つの道のうち、おそらく、いちばん多くの人利用する大阪城公園駅からの道が、もっとも新しい道であることは知っておいてよい。大阪城ホールの開館にあわせて、この新駅は昭和58年にできたのである。その以前、ここから大阪城にいたる道はなかった。道がなかっただけではない。「大阪砲兵工廠」という近代日本の誇る軍事施設、建物があって、行けなかったのである。学生時代、環状線で大阪に通っていた私の記憶に、湿地にはびこる草叢のなかに、蔦を絡ませて立つ古建築が映像として残っている。それが砲兵工廠本館であった。その建物

を、大阪市という自治体が昭和56年(1981)、解体させた。近代建造物としての文化的価値を訴える市民や研究者の声は無視され、跡形もなく、砲兵工廠は消えた。こうして、大阪城公園駅から天守閣にいたる道ができた。

大阪城天守閣は動いていないが、そこにいたる道は確実に動いている。「近代の大阪」を自治体の手で潰すことで、「現代」の駅と道は生まれた。「砲兵工廠」という名所は消え、「大阪城ホール」という新名所が登場した。ここに〈近代〉から〈現代〉への大阪の変化をおくとすれば、〈近世〉(江戸)から〈近代〉への変化もまた、道にかかわる。

今日、キタといいミナミというように、大阪は〈北〉を向いている。南-北が基軸線となっている。しかし江戸時代の大阪は、そうではなかった。いやそうであってはならなかった。この場合かならず、〈東〉が上であった。東は、大阪城の所在地である。天守閣をはじめ、大阪城や町奉行所、大阪代官といった権力機関が、広く上町台地を占めていた。だから西の船場に住む町人たちは、武士の住む、〈東〉を仰ぎ見、また坂を上るといふシンドイ行為をとってはじめて、官衙の前に行くことができた。いかにすれば西と東には、町人と武士といった身分秩序が住む空間の〈高低〉として表現されていた。京都は御所を北にもつため、〈北〉を向いているが、同じ原理で近世の大阪は、〈東〉を向いていた。江戸時代の大阪図を見れば、上に大阪城があり、その左手を流れ下る淀川(大川)が、中之島を抱き込むように蛇行し、安治川・木津川となって大阪湾に注ぐ様が描かれている。安治川口にできた天保山は、見る人のすぐ手前に位置し、今日、北を上にした地図の左手、端っこの方に見つけるのとは趣を異にする。

こんな〈東〉を向いた大阪が、いつ〈北〉に向きを変えたか。大阪市長関一が御堂筋を南北に付けたのは、その意味で象徴的である。御堂筋は、「大大阪ノ中心街路タルニ恥シザル幅員ト体裁」を備えた道路として大正15年(1926)10月、起工式を迎えた。すでに大阪停車場ができ(明治7年)、市電南北線が走り(明治41年)、天王寺公園界隈を会場に第5回内国勸業博覧会も開かれていた(明治36年)。移動する市民の足も、人力車・巡航船・市電・乗り合いバスと足早に変わり、移動するスピードも増した。折しも20世紀の冒頭である。

このころ大阪の街は、自分の向きを〈東〉から

〈北〉に変えた。

### 3 二転、三転する大阪

このように20世紀を境に、大阪は大きく変わった。というよりは〈変化〉の速度が、だれの目にも早いと映った。その結果、大阪市民の間に分岐が生じた。それは「未来に向かう心」と、「過去に向かう心」の分岐である。

大正14年(1925)12月、『大大阪』が創刊されたが、同7年に竣工なったばかりの中央公会堂をはじめとする、中之島の白亜の新建築群を表紙に描いた。さらに誌面には、煤煙問題をはじめとする公害問題に関する論考が掲載された。当時すでに大阪は「水の都」というよりは、「煙の都」として国定教科書(明治36年版)に登場していた。

このような大阪の未来を描こうとする『大大阪』に対し、大正13年3月創刊の『難波津』は、石和版「難波百景」(国員画)で表紙を飾った。江戸時代の大阪を回顧する基調で溢れている。『難波津』のような懐古派は、その後、『郷土趣味大阪人』(1929年)、『上方』(1931年)と続いた。そこで繰り広げられているのは「まるで世界が変わった」という、古老たちの感慨である。

その一人藤沢黄坡(1876~1948)は、『郷土趣味大阪人』の創刊号で、明治末年に父「香翁」(南岳)によって選定された難波の十二名勝を紹介しながら、つぎのようにいう。

大阪の進歩が維新以後に著しいことであつたのはいふ迄もない、さらに近数年間に一層の速度を加へて居る、従つて諸方面に於ける変化は驚くばかりであつて、(中略)其十二勝の中、既に面目を改めてしまつたものと、將に近い将来に改まるうとして居るものがある。「(新難波十二勝の詠について)」。

新築港春潮、造幣局桜花、中津川帰帆、天王寺驟雨、砲兵廠電灯、淀川橋清晨、桃谷駅松籟、鱒子洲秋月、農学校晚鴉、無腎川紅葉、練兵場曉霜、望烟亭晴雪、の十二景勝であつたが、「布帆風を孕む風情は失はれ」、電車の便開けて四天王寺は「昼夜不斷の雑踏の地」となり、鶴満寺も「今は繁華街中に没した」。砲兵工廠の電灯も、「今日のように満市皆灯火昼を欺くに至つては、今昔の感に絶えず」、甚兵衛渡しの紅葉も「これまた今は見る事ができない」。

文明開化の〈明治〉もすでに遠くなっているので

あるから、〈江戸〉にいたってはなおさらである。初代長谷川貞信（1809～79）は、綿喜版「難波百景」（60景余）を描いたが、それを受けて、二世貞信（1848～1930）は、「蒸気車、蒸気船、鉄道馬車等文明開化一点張の世界」の「難波百景」30景を描いた。その二世貞信は、83歳の時に父の「難波百景」の感想を求められ、「今日からみれば、随分所でなく、まるで世界が変わりました」という（「難波名所の変遷」『郷土趣味大阪人』）。彼にとっては、わずか七十年前の光景についてのコメントである。「亡びゆく名所史蹟、廃れゆく風俗行事、敗残せる上方芸術」——これらを「せめて保存に努めたい、そして記録に留めて置きたい」とした、『上方』編輯発行者南木芳太郎の想いは広く共感を呼んだことだろう。『上方』の表紙には毎号、惜し気もなく、二世貞信描く錦絵が貼られた。

#### 4 回想：「古きよき大阪」

江戸から明治の文明開化、そして20世紀の冒頭と、大阪は二転、三転、姿を変えた。とくに20世紀に入ってからの変貌は、同時代人をして〈江戸〉ばかりか、〈明治〉の大阪をも、回想の世界に置いた。「古きよき大阪」である。それはおもに、江戸時代の後期から明治30年代にかけての大阪の姿であるが、20世紀末を生きる私たちにとっても、「古きよき大阪」である。

平成7年度図書館春季特別展、「回想：古きよき大阪 - 江戸から明治の名所めぐり -」は、そのような大阪を、錦絵、名所図会、ガイドブック、年中行事などによって回想しようとするものである。前期は江戸時代、後期は明治時代と分け、前期では道案内、住吉と四天王寺、難波名所、天神祭り、江戸のウォーターフロント天保山、後期では案内記・ガイドブック、寺院・神社と祭礼、港とステーション、鉄橋づくし、大阪新名所として内国博覧会後に建てられた通天閣に展示は及んだ。

このように並べてみると、気付くことがいろいろある。まず名所案内の類。松川半山の作を三点並べたが、「風流画口合難波名処道案内」は名所、「難波名花日どり案内」は花の名所が一枚刷りに彩色で示され、人々を誘う。「難波名所独案内」に見られる「独案内」ものは、「難波諸商独案内」（明治12）、「大阪名所独案内」（同15）、「大阪独案内」（大正3）と、小冊子に形を変えて続けられていく。

名所にはつねに、新旧交替があり、それが版を改

めさせる要因になっているが、江戸時代では、「天保山」が新名所として市民の耳目を引いた。天保2年（1831）の安治川浚えの結果できた人造の山だが、5年には八島五岳の「天保山勝景一覧」、6年は暁鐘鳴「天保山名所図会」が出るといった速報ぶりである。この江戸の天保山は、マンパワーでできた。「砂持ち」と称し、三郷各町の住民が揃いの法被を着け、100～300人前後で、幟に先導されて人力で土砂を運んだのである。それに対しのに大阪商工会議所会頭になる五代友厚は、浚渫を大阪の四大事業の一つにあげ、蒸気機関で果たそうとした。どんな形であろうと、川があるかぎり河口に土砂は溜まり、土砂浚渫の要は減らない。

また海浜にできた土砂の山は、その上にどれだけ強固な建造物ができても、所詮、土砂の山。今度の阪神大地震は、それを実証した。現代の天保山の地は割れ、泥水が吹きあげた（写真参照）。「液状化」現象である。実はそれは、嘉永7年（1854）6月の地震ですで見えていた。この時、「山の如き大浪立、東堀迄泥水四尺ばかり込入」、「海浜の新田畑中に泥水あまた吹上る」さまであったという（「大地震両川口津浪記」）。溺死者がなかったのが、今次の震災の不幸中の幸いかもしれない。



災害でいえば、明治18年（1885）6月の淀川大洪水も忘れられない。この時、安治川にかかる鉄製の磁石橋（商船が帆柱を立てたまま航行できるようにした旋回式可動橋）は強さを示したが、上流からの堆積物が溜まったため、水勢激増を恐れて破壊された。一方、天満・天神の木製大橋は、あっけなく押し流された。そののち21年ともに鉄橋となり、天神橋は人道と馬車道が分けられた。ポツポツと夕闇に灯る明かりのように、鉄橋が大阪の川べりを飾っていく。時として災害は、新名所を作るのである。

だが橋が鉄橋に変わりはじめても、「渡し」はなお健在であった。昭和10年31ヵ所という数字は、同58年の10、現存の8ヵ所と比べて決して少なくない。昭和58年に出た写真集『なにわ今昔』（毎日新聞社）は、ただしくも「水の都：回顧」とした。

私たちから遠のいたのは、川だけではない。海も然り。260キロにわたる大阪の海岸線のうち、自然海浜はわずか2.8キロにすぎない。ふだん、私がジョギングする距離より短い。チヌの海を囲む大阪の位置も、淀川の流れも、ともに変わっていないが、水と私たちの距離は、この20世紀にどれだけ隔たったことだろう。海遊館ができて天保山は、再び名所となって甦ったが、水と私たちの距離は戻るだろうか。

#### 注記

- 1 江戸期を「大坂」、明治以後を「大阪」と表記する慣例を無視した。
- 2 小山仁示・芝村篤樹『大阪府の百年』（山川出版社、1991年）を参考にした。
- 3 阪神大震災直後の「天保山」の写真は、記念講演会（4月26日）を聞かれた西村美紀子氏（大阪市港区在住）から寄贈していただいたものである。記して感謝申し上げたい。

〈やぶた ゆたか 文学部教授〉

---

この講演は、平成7年度図書館春季特別展「回想・古きよき大阪—江戸から明治の名所めぐり—」にちなみ、特別講演会として平成7年4月26日に開催したものである。

〈図書館〉

---